
保健室のメガネちゃん

れん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

保健室のメガネちゃん

【Nコード】

N6940P

【作者名】

れん

【あらすじ】

ここ、「薫高等学校」には保健室に住むという異様な女がいた。その女は「オタクが秋葉原を家にするのと一緒だ」と言い張り、自分の行動のいい加減さを否定しない。だが、そんな女にもついに青春の日々がっ！？

＊＃1＊聖地奪うもの現る！＊

私の居場所。

私の空間。

私の世界。

そう。ここは保健室である。

ここは、私の聖地だ。

オタクが秋葉原を家にしているのと一緒にだ。

ということはイコール、私も保健室を家にしているということだ。
意味が分からない？

それは、この物語を見てからいいなさい！

＊＃1＊聖地奪いし者現る！＊

「ふああ……良く寝たあ！」

いつも通り、いつもと変わらぬ風景の中、私は目覚めた。

ここは私の住んで……通っている学校である。

その名も「かおるこうがっこう薫高等学校」。

ちなみに、薫というのは校長の名前らしい。

「あれ？いつもより外が騒がしいな……。」「

いつもは、野球部の野球バカが数名朝練に来ているだけなのだが。

少しカーテンを開けると、日の光が部屋を照らした。

だが、そんなのもお構いなしだ。

ただカーテンを開けたただけなのに、「死」という恐怖と闘っている

からだ。

こちらに向かってきている野球のボール。

このままだと保健室の窓をぶち破り、私は死ぬ。きっと。

「いやああああああああああああああああ！！！！！！」

倒れるようにしゃがみこみ、両手で耳を押さえる。

どうしよう！宝物のメガネがあああああああ！

って心の中で叫ぶものの、一向に何も起こらない。

これは、きっと助かった……！

そう思い、外をしてみる。

「なあんだ。皆いつも通り……うぎゃー」

この世の女とは思えない低音で叫んだ。

なんと、保健室の窓の下の壁に横たわる一人の男がいた。ダボツと着こなす野球用の服装に、思わず触りたくなるちよつと茶色がかった髪。

まるで生気がない。

「あのーすみません……生きてますかあ？」

そう声をかけても返事は無くどう考えても死んでいる。それでも私は一応もう少し大きな声で呼びかけてみる。

「すみませーん!!!生きてますかー!!!」

「そんな大きく叫ばなくても聞えてるっつーの……。」

私の声を少し遮るように低い声で放つ。

「俺は生きてまーす……。」

そう言ってさっき飛んできたであろうボールを右手に、手を挙げた。

「でも、そのボール当たっちゃったんじゃない。」

弱気に言うが、返事は返ってこない。

また死んだのだろうか？

「骨……やられたかもな。」

そう言って右手で持っていたボールを置き、左の二の腕付近をさする。

そう言った彼の言葉は重苦しく、息苦しそうな声だった。

私は居てもたってもいられなくなった。

「ちょっと待って!! 私医療用具もってそっち行くから!」

そう叫んで、私は医療用具を手に、足早に保健室を後にする。

男の所へはそう時間はかからない。

(でも……急がなきゃ!!!)

私は少し速度を上げる。

やっと着いたところには野球部専属の医療部隊がせっせと治療をしていた。

1人の部隊が携帯を片手にしている様子から、じきに救急車もくるであろう。

（な あ ん だ。 帰 ろ っ と。）

そう言いクルッと背を向けた時。

「おい！その女あ！」

さっきとは違うトーンで男が叫ぶ。

私は何事かと後ろを振り向く。

と、同時に彼がニコッとはにかむ。

「ありがとな」

その一言で、私は何かを動かされた気がした。

***#2*聖地奪うもの現る!?!*(前書き)**

お気に入り登録して下さい方ありがとうございます!!
本当にうれしく思っております・・・^^

*#2*聖地奪うもの現る!?!*

翌日。私は昨日の彼の笑顔が忘れられず、なかなか眠る事が出来なかった。

「空ちゃん。お友達が来ましたよ。」

申し遅れました。私の名前は寺田^{てらだ}空です。

アダ名は「くう」。

メイドさんから告げられた「お友達が来てる」という点に疑問がわく。

ちなみに今日は土曜日。

みんな暇を持て余してるだろうが、私の家にわざわざ訪問してくるような

友達はい人もない。

いると言え、メールを1カ月に1度交わすか交わさないかという幽霊友ならたくさんいる。

「誰えー?」

「良く分からないので、出た方が早いと思いますよ。」

メイドさんに連れて行かれるように私は玄関へ向かう。

思えば、幽霊友の中に私の家を知っている人はいろのだろうか?

教えた覚えもないし、家に友達を入れた記憶などない。

そう思いながらもドアノブに手をかけ、引く。

「はい?」

「あ、俺。昨日の。」

私はすぐさまドアを閉めた。
まず、見た目からして怪我をしたあいつだ。
どうして彼がいるのか。
なぜ私の家を知っているのか。
というか、何で来た？
もう一度ドアを開ける。

「……。」

顔をじっくり見た後、ドアをもう一度閉めようとするが、
彼が手で押さえる。

「あの、覚えてないですか？」

「……。」

やっぱり「昨日の」っていう時点であいつしかいない。
というか、あの人意外に誰がいる？

「誰に聞いたの？ここ……。」

「保健室の先生。」

あんにゃろー！ー！！！！
人の個人情報ペラペラと喋りおって！！
後でしばいたるで！この野郎ー！

「入院したんじゃないの？」

「抜け出してきた。」

こいつはバカだ。
私を巻き添えにする気か？

大体なぜにそこまでして私に会いたいのだ？

「そこまでして何の用？」

ちょっと冷たい視線を送る。

「昨日さ、助けようとしてくれたのに……。」

「いいよ別に。こうして助かったわけだし。」

この発言で沈黙が続く。

まさかこいつこれだけを言いに病院を抜け出したのか？
本当にバカだ。

バカ以外の何物でもないな。

「それだけなの？」

「うん。」

思わずため息が出そうになる。

「空ちゃん。あがってもらったら？せっかく来て下さったんだし……。」

またこのメイドもいらぬ事を。

でも確かにそこまでして言いに来てくれたんだしね。

「うん。じゃあ、あがって」

「いいのか？」

「うん。どうぞどうぞ」

そう言って私は自分の部屋へ手招きする。

こうして友達(?)を部屋へ招くのはやはり初めてだ。
というか、部屋に入れて何を話そうというのだ?

どう考えても沈黙↓一言↓沈黙↓沈黙……という具合に、
はたからみたらお見合いのような空気になるであろう。

「あのさ」

話を切り出したのは彼だった。

「聞いていいのか分かんないけどさ。お前の両親って……」

そこまで言って私を見る。

やはりあの保健室の先生とかいう奴がべらべら喋ったのであろう。

「うん。いないよ。事故で死んだ。」

案外スラッと喋れたことにビックリだ。

そう。私の両親はあの日。あの瞬間。

急にいなくなってしまったのだ。

私の目の前から。

――2000年。空が6歳の誕生日。

「空。パパがどこでも連れてってやるぞ?」

そう言うパパに私は目をキラキラと輝かせた。

「じゃあ、お星様みたいなあ……」

その頃、丁度あるテレビ番組で「お星様物語」というアニメをやっていた。

私はそのアニメにどっぷりハマってしまい、朝7時から始まるというのに、毎朝その時間に起きてそのアニメに見入っていたのだ。

「よし。じゃあパパがお星様の見える丘に連れて行ってやる！」

そう言ったパパの目もキラキラと輝いていた。

その翌日。

私とパパとママとで星の見える丘に行く事になった。

パパが車を運転し、助手席にはママとその膝に座る私。

パパはいつでも安全運転で、よくニュースで「交通事故」が取り上げられると

「バカみたいだな」と笑って言っていた。

だから私は安心だった。

絶対に大丈夫だって思ってた。

そして、丘へ行く途中パパが呟いた。

「ここ道が細いな……」

パパが不安そうな顔で呟いたため、私は

「大丈夫だよ！パパだもん！」

と言った。パパは優しく笑ったため、ホッとした。

その直後だった。

事故があったのは。

「ここを曲がれば丘だよ」

そういうパパは私の方を向いた。

笑顔だったパパに、私も笑顔で返した。

「やっぱりパパは凄いね！」

その一言から私の記憶はない。

だれかにむしり取られたかのようにブツツと消えてしまった。

「そして、もうひとつ消えたのが私の両親。

ここは、私の家じゃないの。借りてるの。保健の先生に。」

この話を聞いて彼はどこか寂しげな顔をして私を見ていた。

「でもね、保健の先生には彼氏がいるから、ずっとここに居られるって

訳じゃないんだ。私がいたらあやしいでしょ？」

彼は確かに。というかのように頷いた。

「じゃあ、その間はどこに居るんだよ？」

それは誰もが気になる点。

でも、それは第1話をみている皆には解決済みの問題である。

「保健室。」

それを聞いた彼は最初はきょとんとしていたが、
だんだん柔らかい表情になり最後には笑った。

「なんかおもしろーな」

私は驚いた。

今までこの反応をした人はだれ一人いなかった。

みんな「聞いてごめん」とか……

いつも聞いてて謝ってほしい何て誰も言っていないのに。
ってずっと思ってた。

確かに謝ってくれるのは嬉しい。

だけど、何だか彼の反応の方がスッキリする気がした。

*#3*聖地奪うもの現る!?!*

そう言えば、今日は保健室の先生の彼氏が来る日。
そろそろここを出なければ。

と、思うが、私の目の前にいる彼が行く手を阻む。

「いや、隠れてればよくない？ 保健室なんて寒いじゃん。」

いや、確かに寒いが・・・もし彼氏と先生が「あーんなこと」や「こーんなこと」を
始めちゃったら私はきつと蒸発して消えてしまう。

「うーん・・・それはちよつと無理かなあ」

「何で。」

クエスチョンマークも付けずに棒読みで言うてくる彼は
表情もまるでない。

というか、あの例のスマイル（1話後半詳細）から彼の笑顔は
見ていない。いつも無表情に近い顔でいる。

まだ出会って間もないが。

「いや、ほらね、保健室のほうが落ち着くし・・・大体隠れる場所
なんて

ないし。」

「じゃあ一緒に病院行かね？」

「は？」

思わず強気で言い返してしまったが、何となく本音だ。

「保健室より病院の方があつたかいよ？」

そういつて私の顔を覗き込むように見る彼の顔はいつもより幼い。

「んー・・・遠慮しとく。保健室の方が慣れてるし。」
「じゃあ俺も保健室に行くよ。」

またまた「は？」と言葉が出てしまいそうだったが抑えて抑えて・・・と。

「いや、迷惑でしょ。それに病院に帰りなよ。」
「大丈夫。いいから一緒に行こう。」

彼の目は真剣だった。まるで私を心配しているかのようだ。そして彼は私の腕をつかみ優しく引っ張った。私はされるがままに彼についていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6940p/>

保健室のメガネちゃん

2011年5月14日13時00分発行